

鈴木鎮一先生の 指導用語事典



かつて全国の教室にも掲示された鈴木先生の「奏法」の極意。鈴木鎮一記念館(松本)でもご覧いただけます



ここでは、かつて鈴木鎮一先生がレッスンで使われた独特な表現や用語を取り上げ、その内容を先生の言葉とともにお伝えします。今回は、鈴木先生が生涯、研究を続けられた弦楽器の右手の問題です。不要な力を早いうちに捨てることで、立派な音に育つ極意があり、さらに弓に奉仕する気持ちが、人生観さえ変えさせる原動力になると、鈴木先生は考えられたのです。

17 汝、弾くなかれ、 弓をして弾かしめよ

生徒 鈴木先生、美しい立派な音は、弦を強く弾けばできるのでしょうか？

鈴木先生 面白い質問だね。それでは「ユダスマカベウスの合唱」を弾いてごらん下さい。

生徒 はい。(ウント、オオキクダ！)

鈴木先生 なるほど、よくわかりました。ところで、あなたは自転車に乗り

始めた頃のこと、覚えていますか？

生徒 (シテンシャ?) 最初は難しく、お父さんに教えてもらいました。

鈴木先生 バランスを取ろうとして、

ふらふらすることが多かったのではないですか。

生徒 はい。転ばないように、ハンドルを握りしめていました。

鈴木先生 今弾いた音を聴くと、腕力だけで自転車を乗りこなそうとしていた頃の状態と同じです。

生徒 (ワンリョク?)

鈴木先生 不必要な腕力が、自転車の自由な動きを邪魔しています。上手な人の自転車の乗り方をご覧下さい。腕力に頼るのではなく、自転車の性能をうまく活用しています。

生徒 力では、ないのですか？

鈴木先生 その通り。上手な人は、相手の力をうまく活用します。この場合は、自転車に乗せてもらっているだけ、と言えます。

生徒 (ソウカ、オモシロイナ)

鈴木先生 弓もその通りで、弓の性能を活かすために、どれだけ奉仕が弓に對してできるかが、その人の能力ということになります。

生徒 先生、奉仕というのはどんな

ことですか？

鈴木先生 いい質問だね。美しい音を出すこと、立派な技術を發揮することは、我を捨て楽器を生かすために奉仕することであり、どれだけ我を捨てることができるかによって、その人の力量の程度が量られるものです。先生は、このことにある気がついたのです。

生徒 (センセイハ、スゴイナ！)

鈴木先生 相手の力を活用するから、けっして自分の力はこめない。それが、相手である自転車や弓の動きを上手にコントロールすることになり、結果として自転車にもスイスイ乗れるし、演奏する音も大きく、美しく、立派になります。

生徒 (オクカフカイ！)

鈴木先生 汝、すなわちあなたが弾くのではなく、弓に自由に弾かせて。そこには自分中心の考えから、他人のために奉仕する気持ちへの芽生えもあります。奉仕の精神こそ、実は音を立派にする原動力なのです。